

2014年12月7日主日礼拝説教(要約)

聖書 ルカによる福音書7章1～10節

説教「ただ一言を求めて」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と主イエスを感心させた人の話があります。主イエスを驚かせたのはある百人隊長でした。百人隊長とは100人からなる兵士たちを統率するリーダーです。当時の事情に詳しい学者によると、この時代はまだローマの軍隊がこの地方に駐屯していることはなかったそうですから、彼はガリラヤ地方を治めていた領主ヘロデ・アンティパスの軍隊の一員だったのでしょう。彼は異邦人で、イスラエルの民の外側にいた人です。しかし、そんな彼の言葉に、主イエスは神の民の中でも見出すことのできなかつた信仰の輝きをご覧になったのでした。

さて、この百人隊長が主イエスに願ったことは部下の病気を癒していただきたいということでした。ここですでに私たちはハッとさせられます。私たちは、信じるというのは当然自分のためだと思い込んでいるところがあるのではないのでしょうか。他人のことはともかく、信仰はまず自分のためと思っているのです。しかし、この百人隊長は自分の部下のために一生懸命になっているのです。彼は自分の大切にしていた奴隷のために身を乗り出し、面倒をいとわず、主イエスの助けを求めたのです。

その願いを主イエスに取り次いだのは、ユダヤ人の長老たちでした。異邦人とユダヤ人が水と油のようになじみあっていた時代に、こうした人間同士のつながりがあったことも注目に値します。長老たちは主イエスのもとに来て、この百人隊長の願いをぜひ聞いていただきたい熱心に願ったのでした。

長老たちから百人隊長の願いを聞かれた主イエスはすぐに出かけられます。ところが、主イエスが百人隊長の家の近くまで来られた時、彼はあわてて友人を遣わして言うのです、「主よ、ご足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」(6節b)。助けに来てほしいと言いながら、来るなどは何事かと思われるかもしれませんが、けれども彼において矛盾はないのです。主イエスに来ていただきたい。それ以外に救いはないと考えているのです。しかし、同時に彼が認めるのは、自分には主イエスをお迎えに行くことも、主イエスに入って来ていただくこともできないということです。卑屈な思いからではなく、神を畏れ、自分が主イエスの前に全く資格のない者だという認識です。

この百人隊長はユダヤ人の会堂造りにも貢献していた人でした。部下の病に心砕く人です。ユダヤ人の長老たちが評価するところりです。けれども、それをもって自分は主イエスを呼び出せる資格があるとか、神から特別の顧みをいただけるとかいった思い上がりをもつことはありませんでした。これまでのよき行いを神との取引材料にするようなことはしなかったのです。周りの人々と比べて、

少々熱心であるとか、真面目であるとか、人々に良く思われているということで驕ることはありませんでした。たとえ人間愛にあふれていても、道徳的にすぐれていたとしても、それで私たちは神に近いわけではないのです。彼は自分が神の前に立ちえない人間であることをわきまえていました。

その上で、百人隊長の主イエスを驚かせた信仰というのは、彼が友達に言付けた言葉にあります。彼は主イエスに求めます、「ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください」(7節b)。ただ一言をくださればよいのだという彼の信頼はその職業経験に基づくものでした。彼は軍隊と言う組織で働いていた人間です。軍隊はどんな組織にもまさって指揮命令系統がはっきりとし、上官の命令が絶対的な権威をもつところですから。そこで彼は権威を持つ者の言葉の力を知っていたのです。自分のような者もまた命令すれば部下たちが忠実に動くことを知っていたのです。

それならば、自分がそのもとに立っている権威よりもはるかに大きく確かな権威を持っておられる方が言葉を発せられたなら、その言葉は必ずなると彼は確信するのです。まことに神の権威をもっておられる主イエスが一言おっしゃってくださいならば、救いの御業は必ず成就する、それで十分なのだと言うのです。しかも、彼はヘロデ・アンティパスのようなこの世の支配者が人を動かすことはできても、人を救うことはできないこと、しかし主イエスは人を生かし救うことのできるお方であることを正しく悟っていたのです。

彼は実に世俗社会の経験の中から、神の民イスラエルが本来もっていたはずの神の御言葉に対する信仰を持つことができたのです。創世記の冒頭に、神が「光あれ」と言われると光があったという記事がありますが、神の言葉はそのまま出来事となるのです。神の言葉は空しく発せられ、空しく戻ってしまうことはないのです。そこに、神の民がその昔から与えられ、受けとめてきた信仰がありました。百人隊長は、驚くべきことに、神に望みをおく民よりもこの信仰をしっかりと身に着けていたのです。

この記事では、百人隊長と主イエスは直接対面してはいません。主イエスの言葉も群衆に言われたのであって、彼自身が褒められているわけではありません。彼はただ主のお言葉がいただければよいと思ったのです。そこには徹底して、見ないで信じる人の姿がありました。主の御言葉の力に対する素朴で力強い信頼がありました。

ところで、主イエスが「平地の説教」で教えてくださった私たちの基本的な生き方、岩の上に土台を置いて家を建てる人のように堅実な生き方はどこから生まれるのでしょうか。それは、「主よ、御言葉をください」と言い、そこにすべてを委ねる信仰に生きることになります。主の御言葉が語られ聴かれるところ、そこに主が来てくださるのです。主が全能の力と権威をもって立ってくださいます。主の力が、私たちを生かし、私たちの愛する人たちをも生かすのです。そこに救いは実現するのです。

(12月7日主日礼拝の説教から)